

審査員特別賞

「幸せ」の支援

学校法人星野学園 星野学園中学校 3年 関 彩花

私は生まれてすぐに病気が見つかり手術をした。そのため、他の人と臍の形が違う。幼少の頃は何も気にしていなかったが、年が経つにつれ、周囲の目と自分自身の「カタチ」に違和感や不幸を抱くようになっていた。

「バリアフリーなご家庭を探しています。」

イギリスからのホームステイ事業に参加した時の事だった。生まれつき長い距離を歩くことができず、車いすで日常生活を送っている女子高校生の受け入れ先がしばらく見つからなかった。それでも彼女は、自分の力で海を渡り、日本文化を学びたいという強い気持ちで参加を熱望していた。偶然にも私の家はバリアフリー仕様だった。私も私の家族も、彼女が満足できる受け入れをできるのだろうかという不安があったが、何とか彼女の手助けをしたい一心で、受け入れを決意した。

彼女の名前はクロエ。クロエはとても明るく気さくで、私ともすぐに打ち解けた。クロエは車いす生活ではあるが、何でも自分でできる。それどころか、日本が大好きで、人力車や着物、和食など実際に日本文化を体験しているクロエの目は本当にキラキラと輝いていた。イギリスの文化についてもたくさん教えてくれた。私自身、イギリスには行ったことがないが、クロエの話を聞いて、イギリスに行ってみたい、もっとたくさんの国の文化を学びたいという気持ちになった。

日が暮れて、自宅でクロエに折り紙を教えていた時のことだった。クロエが話を始めた。「私が車いすに乗っていて、可愛そうとか思わないで。私は今、こうして日本に来て大好きな日本文化を学んでいる。今、とっても幸せなの。人は見た目のカタチじゃない。その人が幸せか幸せじゃないかは、その人自身が決めることなのよ。」

私は、鳥肌が立つくらい衝撃を受けた。なぜなら私自身、自分を「カタチ」だけで不幸と決めつけていたからである。世界中には学校に行きたくても行かれない子供たちがいる中で、私は今こうして学校に通うことができそこには素敵な友達がたくさんいる。そしてクロエと出会えたことで世界観が広がった。こんなにも好きな事がたくさんできている。それこそが心から「幸せ」と思えることであることに気が付き、自分が恥ずかしくなった。

「幸せ」は、人それぞれ感じ方が違う。世界中には、生活物資が手に入らなくても「家族がいるだけで幸せ」と心から感じる子供たちもたくさんいる。私自身、これまで募金や物資で支援をすることが国際協力だと思っていた。しかし、本当の支援とは、世界中の一人一人が心からの幸せを感じられるよう手助けをすることだということに気付かされた。

来年、私とクロエはボーイスカウトの世界ジャンボリーのため、韓国で再会する予定である。私は茶道部で学んだ知識を生かしてクロエにお茶を点て、クロエの大好きな日本文化をたくさん教えてあげたい。クロエの「幸せ」を支援するために。